

平成 23 年 11 月 19 日(土)

13 : 30 ~

新潟県民俗学会秋の談話会

会場 長岡中央図書館

新潟県の木喰仏を巡る

全国木喰研究会事務局長

高橋 実

はじめに

謎に包まれた木喰の旅

なぜ越後なのか なぜ微笑佛なのか 何を目的にしていたのか なぜ全国を旅していながら特定の場所しか仏像を刻まなかったのか。

木喰の笑い

・ 熙怡微笑(密教 般若理趣経) 心の底からこみあげてくる喜びに顔をやわらげ微笑をうかべる 笑いは免疫力を高める効果

「木喰の微笑佛はこの世に生きるわれわれ人間のあらゆる苦悩を、すべて大いなる笑いに解消させてしまった」(宮坂宥勝「木喰仏の魅力」118頁)

まるまると まるめまるめよ わがころろ まんまるまるく まるくまんまる

なむあみだ 妙法れんげ のりたくば しおみそなしに くうかひのあじ

全国木喰研究会とは

昭和 43 年「木喰会」山梨で発足 伊藤勇氏

平成 4 年 3 月 1 日 長岡商工会議所発会式 新潟県木喰研究会 会長 柏崎 三宮勉氏
会員 100 余名

平成 14 年より「全国木喰研究会」と改称 現会長遠藤正光 事務局長 高橋実

山梨に全国木喰会(ぜんこくもくじきえ)(代表 伊藤勇氏)という類似の会が存在する

1、 木喰五行上人

木喰佛 木喰行道、木喰明満仙人とも称する。日本全国におびただしい数の遺品が残る特定の寺院や宗派に属さず、全国を修行して歩く仏教者 遊行僧。全国を旅し、訪問先で一木作りの仏像を刻んで奉納した。木喰より 100 年ほど前に円空がいる。円空の彫刻は野性的 木喰は微笑を浮かべた温和なものが多い。

2、 生涯 (1718~1810)

(木喰は、没年 83 才説と 93 才説の二つがあるが、新潟県の木喰佛背銘は 93 才説の文字が入っているため 93 才説に従って年齢を入れる)

享保 3 年(1718) 甲斐の国東河内領丸畑(現在の南巨摩郡身延町古関字丸畑)に生れる。

父は六兵衛名主の伊藤家次男。

享保 16 年(1731) 14 歳で家人に畑に行くと言い残して出奔し、江戸へ向かった。

元文 4 年（1739）22 歳で相模国古義真言宗に属する大山不動で出家したという。

宝暦 12 年（1762）45 歳で、常陸国（水戸市）真言宗羅漢寺で木食観海から木食戒を受ける。当初木喰行道と名乗る。木食戒とは仏教僧として守るべき規律をさす。木食とは五穀（米・麦・粟・稗・黍）あるいは十穀（五穀＋とうもろこし・そば・大豆・小豆・黒豆）を絶ち、山菜や生の木の実しか口にしないという戒律である。古来木食上人は他に数人おり、豊臣秀吉に重用された木食応其上人はよく知られている。木喰佛の作者は口編の「喰」を使用し、他の木食上人とは区別する。

安永 2 年（1773）56 歳で回国に立出。

安永 7 年（1776）61 才、白道を伴って蝦夷地に渡る。翌年白道とともに作佛を始める。

安永 9 年（1780）63 才、白道と蝦夷地を去る。下野国（現在の栃木県）栃窪の徳性院に留錫。白道とともに五ヶ月の間に薬師三尊と十二神将を刻む。「南無阿弥陀仏国々御宿帳」を書き始める。

天明元年（1781）64 歳 白道と別れ、佐渡へ渡り、4 年間滞在する。

天明 2 年（1782）65 才、最初の歌集「集堂帳」を編む。

天明 5 年（1785）68 才、佐渡で育てた仏弟子丹海に九品堂を託して佐渡を去り、二度目の帰郷。

天明 7 年（1787）70 才、四国へ渡り、四国遍路を逆コースで回る。

天明 8 年（1788）71 才、四国遍路から九州へ渡る。日向の国分寺で十年間住職を務める。

寛政 5 年（1793）76 才、「天一自在法門木喰五行菩薩」を名乗る。国分寺が延焼して再興に尽力

寛政 6 年（1794）77 才、年齢を 10 歳加算する。以後すべて自称年齢となる。

寛政 9 年（1797）80 才、長崎の毘沙門天の背に「日本千体ノ内」と記す。二度目の四国遍路。

寛政 12 年（1800）83 才、駿河を経て 28 年の回国を終えて帰郷。

享和元年（1801）84 才、四国堂造営に着手。

享和 2 年（1802）85 才、故郷をたち、諏訪から越後に入る。長岡青柳家に留錫。

享和 3 年（1803）86 才、この年越後で 120 体余の仏像を刻む。青柳家の清右衛門は木喰に随従して仏像に「カセイ」の文字刻まれる。再度佐渡行きを目指して出雲崎に滞在するが、渡れず。

文化 2 年（1805）88 才、柏崎の枇杷島で「八木版画」を刻む。佐渡行きを断念。越後で 90 体の仏像刻む。この年三国峠を越えて上州へ向かう。

文化 3 年（1806）89 才、諏訪を経て上洛。丹波猪名川清源寺にて十六羅漢造像中に「明満仙人」を名乗る。同寺の釈迦如来の背銘に「與清」の署名現れる。

文化 4 年（1807）90 才、清源寺の自刻像に「日本二千ノ内ナリ」と記す。京都で仁

和寺を経て諏訪へ向かう諏訪の慈雲寺阿弥陀如来が現存する最後の作。以後足取り不明。

文化7年(1810)93歳で没す。終焉地不明。

3、忘れられていた木喰

木喰の存在は死後100年以上忘れ去られていた。木喰の再発見者は美術史家で民芸運動の推進者柳宗悦(1889~1961)であった。柳は大正13年(1924)山梨県池田村(現甲府市郊外)村長小宮山清三宅を訪ね、所蔵の朝鮮陶磁の調査をして居た時、同家所蔵の木喰地藏菩薩像、無量寿菩薩像、弘法大師像3体を見出し、木喰仏の芸術性に打たれた。その後、木喰仏の調査に日本各地を奔走する。丸畑で刻まれた四国八十八体仏は、大正8年伊藤家と村人との間に起きた所有権争いの結果8体は別として総て全国に四散した。木喰仏の墨書銘や納経帳宿帳など自筆文書を発見、木喰の足跡が解明される。

大正13年9月初め小宮山は刈羽郡を訪ねる。小国太郎丸真福寺で木喰仏4体を発見。柳は柏崎の吉田正太郎を通して、柏崎近辺の木喰仏調査を依頼する。10月小栗山観音堂の存在を知る。柳は10月12日柏崎に来る。吉田らと合流し、17日帰宅予定を繰り延べ、小栗山観音堂。太郎丸真福寺。西之入安住寺。鳥越大日堂。琵琶島十王堂。大清水大泉寺。野田村熊谷。椎谷坂下観音堂から107体の木喰仏を発見する。

4、佐渡の旅

天明元年(1781)佐渡へ上陸。微笑仏は見られず。

大黒天 天明2年6月 沢田山中家 薬師如来 地藏菩薩 天明2年7月 相川町清水寺

天明2年 円照寺 子育て地藏 天明4年5月21日 相川大興寺 弘法大師

天明5年(1785)佐渡梅津に九品堂を建設。

5、木喰の越後の旅経路

現存する越後の木喰仏 260体 全国の木喰仏610体の4割にあたる(微笑仏 2号 大久保文による)

享和2年(1802)三国峠を越えて暮に長岡上前島 青柳家に入る

享和3年(1803)8月1日~24日 小栗山 観音堂 西国三十三観音

文化元年(1804)2月11日 年号文化に改まる

文化元年4月21日~5月20日 小国太郎丸真福寺 仁王像 立木観音

文化元年(1804)6月9日~7月13日 白鳥 宝生寺 西国三十三観音聖観音菩薩

文化元年(1804)7月14日~8月14日 上前島秩父三十四か所観音菩薩

8月15日 自身像

8月13日 小国太郎丸 金毘羅大権現

文化元年(1805)9月8日~10月9日 柏崎市石曾根 安住寺 如意輪観音

10月18日 柏崎市安田 鳥越大日如来

11月9日~2年正月25日 柏崎市関町 十王尊坐像

文化2年(1805)

1月 大清水 真言宗 大泉寺 子安地藏

2月 柏崎市西港町潮風園 興教大師（大泉寺で刻む）
 3月28日 円蔵寺不動尊像 4月 毘沙門天 上越市大潟区円蔵寺
 5月12日 大島区大平 大安寺金毘羅大権現
 5月 野田村 熊谷今井家 天満宮
 6月10日 柏崎市椎谷机立観音堂 薬師如来
 6月 柏崎市新道 興教大師
 6月22日～28日 柏崎市西山町長嶺 西光寺 十二神将
 7月 出雲崎町釜谷 聖観音
 8月5日 柏崎市高柳岡野町 薬師如来
 8月27日 南魚沼市大崎 不動明王
 9月 南魚沼市塩沢町 吉里 子安観音
 9月11日 南魚沼市 栃窪十二神社 山神
 10月 湯沢町神立 愛染明王

以後6ヶ月は謎の期間 三国峠から上州を経て信州へ
 文化3年(1806) 5月 岡谷市長地の阿弥陀如来。

6、越後木喰仏の特徴

(1)群像が多い 西国三十三観音2例（小栗山・宝生寺）秩父三十四観音1例（安住寺） 悲母三十三観音 一例 十三仏 十二神将 十王尊など

(2)一木彫成 巨像が多い 太郎丸 真福寺仁王像 阿吽 小栗山観音堂如意輪観音(2メートル40センチを越す)

(3)像裏銘「寿百万歳」の文字が 自らの長寿を祈願する。

なぜ越後に膨大な作品を残したか {それは天明期における回国の道すがら触れた越後の人々のこまやかな人情と村里に息づいている篤い信仰ではなかったか} (大久保 微笑佛2号)

7、宝生寺の木喰佛 西国三十三番観音

文化元年(1805) 6月9日～7月13日まで三十三体が刻まれる。一日3体を刻む日もあった。迎えたのは、第37世 義天和尚。自刻像のみ8月16日 上前島青柳家で刻む。

像種 聖観音(総高88[㌢]) 8体 十一面観音 7体 千手観音(総高91[㌢]) 6体 如意輪観音(総高90[㌢]) 4体 大提観音3体 馬頭観音 3面馬頭 一面が笑っている。「仏像の交響曲と呼ぶにふさわしい」(五来重)2体 子安観音1体 富王白衣観音1体 7月12日に刻む 他 総高90[㌢]前後 14日には青柳家に向かって旅立つ 如意輪観音は 微笑仏中の白眉。自刻像 8月16日 44,5[㌢] 青柳家で刻む。お上人さまと呼ばれる。

境内の銀杏の大木を刻む。

境内の白山神社観音堂に安置。幕末観音堂火災。山門の楼の上に置かれる。

大正十三年頃物置に半分 近くの尼寺に半分置かれていた。

同年4月21日 預けていたものを取り返し、檀に供える。

昭和四十三年 本堂前の木喰堂に安置。一体を欠く。

木喰歌碑「福は内、満免で納むる年のくれめったむしゃうに満免のよの中」

8、真福寺の木喰佛

真福寺第15世円成和尚の懇請で仁王像を彫る。地元の長谷川松太郎が加勢する。小像に願かけ額を奉納する。

- ・仁王像 阿像 吽像 隣の諏訪井集落白山神社の樺の木から彫ったという。大工長谷川松太郎が手伝い、線香の明かりを頼りに彫ったといわれる。

阿像 高さ 2,463 ㍉ 重さ 525 k g 文化元年 4月21日完成

吽像 高さ 2,455 ㍉ 重さ 375 k g 文化元年 5月2日完成

- ・立木観音 太郎丸上坂正助の庭の梨の木に刻まれた。天保12年この木が枯れて、尊像部分を切り取り、明治41年裏庭に堂宇を立て、7月9日遷仏式を行った。

生木のも心をこめて祈るなば二世安楽のたそくなるらん

- ・金毘羅権現 (総高 51 ㍉) 享和4子年8月13日と刻まれている。この時には、木喰上人は真福寺を去っており、青柳家で刻まれたものが真福寺に残る。

- ・龍水の軸 裏書きに上人が文化元年4月1日にきて5月20日に去ったと書かれている「五行菩薩 文化元年甲子四月朔日古志郡小栗山村ヨリ真福寺ニ来五月廿日送 保坂六郎左衛門」小宮山清三(消防団創設者)、大正13年9月28日 柏崎小学校で消防に関する講演をする。ここに参加していた小国の出身者から真福寺の仁王像の話聞き、予定を変更して小国に赴く。さらに安住寺の群像の噂も聞く。柳に報告する。

9、小千谷小栗山木喰観音堂

広井平蔵 享和3年から同4年にかけて 35体の大群像 内如意輪観音最大(像高2.4 ㍉) 背銘「享和三年 八月朔日 日本千タイの内 天下和順 天一自在法門 日本廻国 86歳 日月清明木喰五行菩薩」32体すべて「八月朔日」の背銘いれる。大黒天像(1.22 ㍉ 八月二十四日)、行基像(1.22 ㍉ 八月二十四日)、子安観音(総高 72 ㍉) 村人へ5体 40体を彫り終えた。広井平蔵家に一年滞在。広井弥五左衛門家蔵 阿弥陀如来像、広神村真福寺の3面馬頭像(総高 73 ㍉)、国立博物館自刻像 池の窪 広井正喜家に心願和歌集、六字名号、米寿自祝掛け軸 木挽き五郎兵衛 銀杏用材の玉切りを手伝い十一面観音を贈られる 40体の彫仏、書軸二、心願和歌集、六字名号、米寿自祝画軸、合計45点を残す。広井弥五左衛門家出身、広井信之 蔵王の代官職 木喰を小栗山に誘った。

大正13年10月12日 柳宗悦小栗山訪問 六日市駅より徒歩。小栗山出身彫刻家広井吉之助案内。父広井一北越新報社創立。昭和初期堂の大改築。桑原伊佐吉宅に預けられた。昭和43年3月 新潟県指定文化財の指定

10、青柳家の木喰佛

秩父34所観音 聖観音(総高 65 ㍉) 以外子安観音1体のみ。十一面観音(総高 64 ㍉) 金毘羅大権現、自刻像(総高 79 ㍉) など40体を刻み終える 版木、奉納木額「…

又外ニ薬師金毘羅賓頭盧尊者三三躰ハ外へ行」とある。文化元年 8 月 16 日 清右衛門同道して出雲崎を目指す。先祖清右衛門が文化元年から足掛け 4 年木喰に随従し、下諏訪での別れに際して白衣観音（総高 36.5 ㍍ 文化 4 年 3 月 11 日）、笈箱の中の不動明王（総高 17 ㍍ 文化 3 年 7 月 4 日）、護符版本を形見として与える。諏訪で木喰は與清（清右衛門）に別れを告げる。4 年間働き手を失っていた青柳家は家の傷みが進み、壊れた屋根から星の光が見えたという。清右衛門は文化十三年 7 月 2 日他界。木喰佛を子ども達が川遊びの浮きにして遊ぶ。

青柳家では、木喰の寝所に天井を張り、庭の里柿を支柱に作業場を建て、何十貫もの喜捨を集め、信濃川対岸の浦から銀杏の老木を運び入れ、木喰がすぐ鑿を入れられるようにして木喰を迎えたという。ここで刻まれたのは、秩父三十四観音・金毘羅大権現・二体の自刻像・真福寺へ贈られた金毘羅像など三体の都合 40 体 3 2 日間での作であるから驚嘆すべき速刻の例証と言えよう。

享和 2 年暮れ青柳家で宿す。 3 年閏正月 18 日名号軸を揮毫する

11、横向きの木喰佛作例 3 体

刈羽郡野田村熊谷今井家の梅の立天神木佛（現北条村木村家後に県外に流失）

東頸城郡大安寺で横向きの彫像那伽犀那尊者を刻む。青柳家の白衣観音も横向き

12、良寛の木喰評（1758～1831）

今の世木喰行者なる者あり。身、人里に住し、ことさらに五穀を食はず、これ何の法ぞ。仏法に似て仏法にあらず、外道に似て外道にあらず。これ所謂異を顕わし衆を迷わす者か。然らざればすなわち深く仏法に狂酔せる者ならん。世人のこれを信恭すること六通の羅漢のごとし。彼等もまた人の信恭頻りなれば、すなわちわが道を殊勝なりと謂えり。苦しいかな、苦しいかな。一盲衆盲を引きいて、将に大坑に墜ちんとす。

請受食文より 原文は漢文読み下し文にて「全釈 良寛詩集」東郷豊治著

13、木喰五行の風貌

往年文化三年丙寅の冬十月、凶らずも木食行者上人来入せり。嘗て行者の徳名を聴く、則ち東海道甲国の産にて日向州国分寺の前住大上人なり。容貌を視るに顔色憔悴して鬚髮雪の如く白し、乱毛蝶の如く垂る、身の長六尺なり、壊色の衣を著、錫を持って来り立つ、異形の物色謂ひつ可からず、実に僧に似て僧に非ず、俗に似て俗に非ず、変化の人かと思ひ狂者の惑ふかと疑ふ。先師見て問ふて曰く子は何人ぞや。行者曰く、諾、某は木食五行菩薩なり…

柳宗悦「丹波に於ける木喰佛」より

清源寺十三世佛海禅師著「十六羅漢由来記」

（原文は漢文、柳が和文化したもの）